歴史随想

「毛利高政」を脱稿して

御手洗　一而
（会員・川越市小堤）

断片的に毛利高政の資料を漁ったのは、もう十年も昔のことであるが、『佐伯史談』一一七号（昭和五十四年二月）に、第一篇を所載された時のことを昨日のように思い出す。羽柴先生との会話が今だに耳許に残っているからである。

「先生。あげん原稿を史談にのせたらいけんで」

「なんでえ。肩んこらんいゝ読物じゃ」

「史談の権威を損のうちゆうて心配しとるんで」

「何を言うちょるんか。史談は学術誌と違うんでえ。そげん心配はわしに任しとけ」

「ほんならお任せします」

私はそうは言ったものの気が進まなかった。私自身、毛利高政公をどうして書き始めたか、今だにそのきっかけが思い出せない。

さきに出版した一族の歴史小説を書く上で、近世の藩と庄屋の在り方、藩の庄屋政策といえば、中世史と近世史の狭間にあって、毛利藩と佐伯氏遺臣との関係が頭にあったらしいが、どうもさだかでない。

そのうち、羽柴先生との電話や文通の中で、

「あんた、高政書いちょるんで」

という、励ましとも催促ともつかぬやりとりが続いた。

その頃、私の頭には、毛利資料を見ずして毛利高政は書けないと決めていたが、先生はその後容赦なくある新聞にのせた。

「御手洗君。あん資料は何時になるか分らんで」

「ほんなら私も年をとるが」

「ほんじゃ。資料んこたあもうええ。今んうち書かんと、あんたでなきゃ書く人がおらんのじゃ」

先生にもち上げられた私は、それでも念のため、帰郷に当って新装なった市の図書館を訪ねたが、資料の閲覧は剣もほろろに一蹴された。

その時、藩政資料はきっぱりあきらめた。おいらの高政公を全国に問うというのに、情ないうらみをこめて。

そして、この物語りを書く上で、私の必要な史料は、山城の北出丸の火災や落雷で焼失したと思うように考え直した。そうでも思わなければやり切れなかった。

それから、ぼつぼつ書き続けてみると、戦国時代にしては平凡な大名高政は―結果的にそう見えるだけだが―今にして非凡さを歴史の上に残している。

当時の塩屋浜を埋め立てて造られた城下町は、都市工学でいう現在佐伯市の原型を設計し、海産物の一つをとっても、唐人干の美味は将軍の口まで上らせて佐伯名産の礎を作りあげている。これらの高政公の功績は、現在の我々に、いつもその恩恵を与えている。

同僚に比して、平凡であったがための高政の生涯は、こうして次第に不思議な魅力ある人物として私をとらえていた。

高政の同僚には、秀吉の長浜城の長屋で育てられた、「おい虎之助、市松、佐助、助佐」と呼び合える、上記から清正、正則、三成、且元らのけんか仲間がいた。

歴史上、華々しい足跡を残した仲間に対して、高政の名はそれほど知られていない。だからあえて平凡と書いたが、その高政の佐伯藩だけが何故か維新まで続いた。

わが国では、巷間、人物を評して、信長型・秀吉型・家康型と類別する習慣がある。又秀吉の子飼い大名には、武断派と文吏派の区別もあるが、高政の生涯は常に華々しい仲間の枠外におかれていた。その佐伯藩だけが存続した。

果して、何れの生き方がより人間的であり、又共感を呼ぶか、各々のひいき筋の中に、一つの選択の価値ある人物として、高政を世に問いたかった。

長浜城の長屋仲間で、歴史上一番先に顔を出すのは高政である。

備中高松城の人質の一件がそれであるが、毛利の人質の代りに、秀吉側は人材がなく高政を選んだ。そこには従順で律儀な親譲りの性格があった。が、秀吉側は毛利

に高政の毛並みを何と紹介したものか困ったであろう。
策士黒田如水は仕方なく秀吉の庶子として高政を毛利の軍僧安国寺に匂わせた。高政の秀吉庶子説は案外こんな所から起因したかもしれない。
毛利輝元は、とにかく高政に対する秀吉の寵愛を信じた。そして、秀吉にとり入るために高政に森から毛利姓を名乗って貰いたかった。
こんな高政に近づく世渡り上手な武将がもう一人いた。藤堂高虎である。高虎は高政を利用して秀吉の弟秀長から秀吉、やがて家康と近づいてゆく。のちに高政は高虎から友情のお返しを受けるのだが。
青年期の高政は、秀吉の意のまゝに、人質から殿軍（しんがり）、勝てば敵将の検使役、損な同僚の嫌がる仕事ばかり廻ってくる。結婚もそうである。奥方の出である木曽氏は、家康の筆頭老臣であった石川数正一派の武将である。家康側からスパイで送られたという一派が、秀吉にとり入るための策略か、秀吉の逆利用か、とにかく木曽氏の娘と結婚している。
高政は秀吉に使われ、外からは利用され、嫌と言うことができなかった。たゞし、この時期に、生涯の人望をかち得ている。
だが、人望だけで青年の夢は満たされるものではない。城持ち大名の実現に焦った。
手勢をもたない高政の苦労がこの頃から始まる。
清正、正則が大名に出世する間、高政に対して、盛んに「ごね得」をすゝめるが、高政はそんな性格はもち合わせていなかった。
清正や正則にとっては、高政の人のよさがはがゆくて仕方がなかったであろう。やがて三成も佐和山城主に出世するが、高政はまだ三千石、秀吉に使い捨てされる危惧を抱いたのはこの頃である。
高政がやっと日田二万石を受領するのは、朝鮮の前役後、大友除国後のことである。
たゞし、この時豊後には三成の腹心が続々と豊後入りする。
高政の生涯における圧巻は、これから関ケ原の決戦にかけてであろう。
「勘八郎。おぬし三成の使い番にされるぞ」

とは、清正や正則のはっぱであるが、
「勘八郎。小西行長の講和の邪魔をするのは虎や市松じゃ。俺が上様の命令を伝達するのを、俺のさしがねと勘違いしている。困った奴らじゃ」
と憤慨するのは三成であった。
高政は常に両者の聞き役であった。
秀吉の死後、長浜の長屋連中は遂に分裂した。清正や正則の武断派は、とにかく三成が憎かった。そして同志討ちの漁夫の利を得るのが家康であることに気付くのが遅かった。
そこに気付いたのは三成だけであった。
その点では豊臣の忠臣であった三成も、自分が正面に出て、忠臣面をする器でないことを悟れなかった小才が遂に悲劇を招いた。
所詮、最初から天下を狙う家康に匹敵する長屋連中ではなかった。
だから、清正は名古屋城の徳川の課役の帰途急死して毒殺説まで噂され、正則も抹殺される運命を辿る。関ケ原決戦の時から、家康の構想の中に描かれた筋書であったとは思いたくないのだが。

ところで高政公や如何。この歴史的分析が実に面白い。
先ず、嫌気がさす程秀吉にこき使われ、寝返り組の嫁まで押しつけられた高政の辛棒は、家康の秀吉に対するがまん比べと似る所が多い。そしてその裏には、秀吉が織田を裏切った妥当性と家康の天下盗りの妥当性を冷静に凝視していたふしがある。
関ケ原に移行する間、高政は清正や正則に「太閤の恩を忘れたか」となじる。反面、三成には、秀吉の名の許に「豊後の人事までほしいまゝにしたか」と暴く。三成、淀君の連合する大坂勢は、高政の考える豊臣ではなく命を投げ出す気にはなれなかった。かといって、家康に義理もなかった。
関ケ原の時、高政は丹後の田辺城攻略中であったが、得意の大砲を天空めがけて撃つような、気のすゝまぬ合戦であったろう。関ケ原に参陣せずにすんだのが第一の好運であった。
九州を発つ時、高政は肥後在国中の清正と連絡をとり、如水とうち合わせて万全を期した。日和見的というよりも、大坂方には豊臣に顔を立て、東軍には藤堂の縁でつながっていた。これとても高政から家康に近づいたので

はない。朝鮮役の目付の訴訟から自然にそういう流れになっていた。

そして第二の好運は、大身大名でなかったこと、これは高政の期待とは裏腹に、優遇されなかった秀吉に感謝しなければならない。これも時の運神の恵みとしかいいようがない。

関ヶ原直後、高政は高虎に伴われて大津城で家康の前に出た。

「豊後の小童大名は許せぬが、民部だけは責められぬのう」

家康の一言であった。

目付の戦陣日記に公正を保ち、在鮮部隊の渡海を最初から最後まで見届けた高政の姿に、さすがの家康も首がきれなかった。

そこには、家康と雖も、人間性の機微があった。

高政は家康に刃向かいながら首がつながったが、これから徳川の外様大名に対する嫌がらせが始まり、加藤、福島はやがて消えてゆく。高政はこの徳川のテストを受けて立った。むしろ、高政は壮烈な余命の生きがいとして、無言で徳川に立ち向かった。そして、毛利藩家中にも徳川に口実を与えるなが合言葉のように浸透した。

そして徳川三代、家康、秀忠、家光にわたるしつような豊臣大名に対する徳川のテストに合格した。

小説では、高政の最期を見舞う藤堂高虎にこう言わせた。

「長州も島津も、太閤を祀る豊国神社には参拝したいわい。だがそれが出来ぬのじゃ。それが出来るのは、天下広しと雖も、伊勢守、おぬしだけじゃ。徳川の眼にも、おぬしなら恩を忘れぬ見上げた大名だということになる。そこじゃよ。この時代にそれを通せるおぬしが羨ましい。わしは三木城攻略以来、いい友人に恵まれて感謝している」

徳川草創期のこの時期に、気がねなく秀吉を祀り家康を祀れる高政に、私は好感を覚える。現在だからこそ言えることかもしれないが、高政の生涯は策をろうせず人の道に従うことによって道が拓ける、戦国時代に珍しい武将であった。現在に通じるこの武将、果して戦乱期の武将としてどう評価したものであろうか。

原稿用紙千枚はきつかったが、佐伯の恩人である高政公を大きな視野から脱稿し、とにかく羽柴先生との約束を果たしてほっとしている。一仕事終えた今、皆様の御批正を仰ぎたくこの稿を終ります。

尚、「毛利高政」上・下巻は、新人物往来社より年内に発行の予定です。